The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ダルモッタラの消滅の無原因性に関する理解
——ツァンナクパの *Pramāṇaviniścaya* 註釈に基づいて——

崔　境眞

ダルモッタラは，PVinṬの中で，vināśitvānumānaに関して独特な意見を述べている．彼はその論証因である消滅の無原因性（ahetutva）が，sādhyaviparyaye bādhakapramāṇa（所証と矛盾した属性を拒斥する論証，以下bādhakapramāṇa）を補助する（parikara）働きがあると主張する[1]．PVinṬでは，対論者の「常住なものでも，例えばハンマーなどの協働因（sahakāripratyaya）に依存して消滅する壷のように，効果的作用を為す能力がある」（PVinṬ 2,6–14）という反論が提示され，その反論に回答する形でダルモッタラは彼自身の見解を述べる．ダルモッタラは二通りの答えを出したが，それが反論の内容とbādhakapramāṇaの内容とにどのように対応しているかは明確ではない．他方で，ツァンナクパ・ツンドゥーセンゲ（gTsang nag pa brTson 'grus seng ge: 12c.）は，自身のPVinに対する註釈 *rNam nges Legs bshad bsdus pa* の中で，ダルモッタラの回答を次のように解釈している．すなわち，消滅の無原因性を用いて，反論者の喩例を退けることによってbādhakapramāṇaの主題所属性が，そして反論者の論証因を退けることによってbādhakapramāṇaの遍充関係が，確定されると言うのである[2]．

【資料1】bādhakapramāṇa[3]

主張命題：常住なものは，効果的作用を為すことが不可能である．
論証因：継時的にも同時的にも効果的作用を為すことと矛盾するからである．
遍充関係：継時的にも同時的にも効果的作用を為すことと矛盾するならば，必ず効果的作用を為すことは不可能である．

ダルモッタラ自身，PVinṬの当該個所においてbādhakapramāṇaの「主題所属性」や「遍充関係」という言葉は使わない．だが，ツァンナクパの解釈は，反論者の主張とダルモッタラの回答を論証式上で体系的に検討することを可能にすると思われる．それ故，本稿では，ツァンナクパの理解に立脚してPVinṬの該当箇所の反論とダルモッタラの回答を考察したい．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ツァンナクパの解釈

【資料 2】ハンマーは〔壷が消滅する〕以前〔の段階〕では壷に対して全く〔作用を〕為さないけれども，壷の消滅がハンマーに依存しているように，常住なものに対して〔協働〕因は，〔何の〕差異（変化，khyad par）も為さないが，〔常住なものは，協働〕因に依存して効果的作用を為すのであると考えている者〔がいる．その者〕に対して，消滅は原因に依存する〔ということを示す〕喩例が成立しないと示したので，〔消滅の無原因性は，bādhakapramāṇa の〕主題所属性の道を浄化するもの（lam sbyong pa）である．

【資料 3】そして，作られたものが常住なもの〔の領域〕から退けられることを理由にして，〔作られたものは必ず〕消滅すると確定されている〔という我々の主張〕に対して，〔消滅は外的な原因に〕依存するが故に，〔作られたものは必ず消滅すると〕確定されないという推理をすることによって，〔bādhakapramāṇa には〕相違決定（'gal ba mi 'khrul ba, *viruddhāvyabhicārin）〔という欠陥がある〕と考えている者〔がいる．その者〕に対して，消滅が原因に依存するという論証因が成立しないと示したので，〔消滅の無原因性は bādhakapramāṇa の〕遍充関係の道を浄化するものである（*rNam nges Legs bshad bsdus pa*, 134b1–2. Cf. tr. 根本裕史［2011］: 120, n.52）．

ツァンナクパは，誤った理解を持つ 2 人の反論者に対するダルモッタラの回答を，上段に①〈喩例の不成立 → bādhakapramāṇa の主題所属性の確立〉，下段に②〈論証因の不成立 → bādhakapramāṇa の遍充関係の確立〉というような構造で整理する．

①喩例の不成立 → bādhakapramāṇa の主題所属性の確立　ダルモッタラは，壷の消滅の外的な原因としてハンマーなどの協働因を喩例と想定し，壷がハンマーに依存して消滅するのは不可能であることを説明した（PVinṬ 3,1–7）後に，次のように述べる．

したがって，〔ダルマキールティは，〕全く働きを為さない諸々の消滅の原因は，〔ものを〕消滅させるものではないと証明してから，非刹那的なものに対して全く働きを為さない諸々の協働因もまた〔常住なものが結果を作る際に〕協同して働くことを否定した後で，bādhakapramāṇa を示そうと〔考えた．〕それゆえ，まさに bādhakapramāṇa の下準備をする補助するもの（parikara）によって浄化する（pariśodhana）ために，これ（消滅の無原因性）が述べられたのである（PVinṬ 4,8–11. Cf. tr. Sakai［2010a］: 122–123ff.）．

ダルモッタラがここで否定しようとする反論者の主張は，非刹那的存在は外的な協働因の働きに依存して効果的作用をなすというものであると考えられる．反論者の主張を支えている喩例，ハンマーなどの協働因は，非刹那的存在が消滅する際に消滅の外的な原因として協同して働く能力があるものである．もし，この

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ような反論者の主張が成立するならば，bādhakapramāṇa の主張命題（【資料 1】）に関する疑惑が生じる．よって，その喩例が成り立たないこと，すなわち，ハンマーなどの協働因に結果を生み出す能力がないということを証明することによって，bādhakapramāṇa の主題〈常住なもの〉が，論証因〈継時的にも同時的にも効果的作用を為すことと矛盾するものである〉に例外なく属することが確立される，というのがツァンナクパの解釈である．

②論証因の不成立 → bādhakapramāṇa の遍充関係の確立　ツァンナクパは，次のようなダルモッタラの回答から，ダルモッタラが反論者の論証因を否定しようとしていることを見出したと考えられる．

> さらにまた，消滅が〔外的な〕原因を有すると認められている場合に（prasiddhe），〔非刹那的存在は〕継時的または同時的な効果的作用が全く不可能であること（anupapattir eva）を示せなくなるだろう．すなわち，〔他の外的な〕原因を有する消滅は，特定の場所と時間にあるので，継時的または同時的であることを理由に刹那滅であることを〔証明することができ〕なくなるだろう．それ故にまた，これ（消滅の無原因性）は bādhaka〔-pramāṇa〕を浄化するものである（PVinṬ 4,11–15. Cf. tr. Sakai［2010a］: 123–124ff.）．

消滅が外的な原因を持つという反論者の主張が認められた場合には，bādhakapramāṇa の遍充関係（【資料 1】）が成立しなくなってしまう．なぜなら，継時的にでもなく，同時的にでもない，他の外的な原因が近在するその特定の時間に効果的作用があることになるからである．この場合，常住なものにも効果的作用能力があると認めることになる．よって，ここでダルモッタラの否定対象は，「消滅は外的な原因を有する」というものであるが，ツァンナクパは，その同じものを反論者の論証因であると考え，反論者が相違決定を指摘していると理解している（【資料 3】）．上記の引用と【資料 3】に基づいて反論者が想定していただろう相違決定という事態を推論式の形式で示すと以下のようになる．

> ＊主題：作られたものは，
> ［所証 1］必ず消滅すると確定される．［論証因 1］常住なものではないから．
> ［所証 2］必ず消滅するという確定がない．［論証因 2］消滅の原因に依存するから．

反論者は，ダルマキールティが因果関係の肯定的・否定的遍充関係が知覚と非認識によって決定されると認めたのを根拠に，消滅の原因が近在することによって，消滅が成立するということを前提にしている[4)]．その上で論証因 2 が提示されている．この場合，論証因 1 と論証因 2 を一緒に考えた時に，所証 1 と所証 2 のうち，どの所証が正しいのか判別できない．だから反論者は，ダルマキールティの

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

思想が自己矛盾に陥ると批判するのである．よって，「消滅が外的な原因を有する」という反論者の論証因を否定すれば，相違決定という欠陥が解消され，bādhakapramāṇa の遍充関係が確定できるのである．

おわりに　反論者の主張は，常住なものであっても消滅の外的な原因に依存して効果的作用を為す能力があるということであった．それに対してダルモッタラは，消滅の無原因性を用いてその疑惑を排除し，bādhakapramāṇa を補助することができるという回答を出している．ツァンナクパは，さらに踏み込んで，反論に対するダルモッタラの回答を喩例の否定と論証因の否定に分けて，その各々によって，順に bādhakapramāṇa の主題所属性と遍充関係が確立されると解釈した．本稿では，ツァンナクパの指摘を元に，ダルモッタラの回答を再解釈できることを確認した．

1）Cf. Sakai［2010a］: part 1, Id.［2010b］, 根本裕史［2011］: 120–126.　2）消滅の無原因性が bādhakapramāṇa の主題所属性と遍充関係のそれぞれを確定するという解釈を最初に示したのは，ゴク・ロデンシェーラブ（rNgog Blo ldan shes rab: 1059–1109）である（*bKa' gnas rnam bshad*, 82a1–3ff.）．その内容はツァンナクパとほぼ一致しているが，本稿では，論旨がより明瞭であるツァンナクパの文章を基準に考えたい．　3）この推論式は，PVin 80,1–2（29*14–17, tr. Steinkellner［1979］: 93, 1–5）と，それに対するツァンナクパの註釈（*rNam nges Legs bshad bsdus pa*, 136b3–4）を参考に構成したものである．
4）Cf. PVinṬ 5,8–10, PVin 85,6–7（tr. Steinkellner［1979］: 102–103ff.）．

〈略語〉

bKa' gnas rnam bshad（rNgog Blo ldan shes rab. *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad: bKa' gdams pa'i gsung 'bum*, vol. 1.）. *rNam nges Legs bshad bsdus pa*（gTsang nag pa brTson 'grus seng ge. *Tshad ma rnam par nges pa'i ṭi ka legs bshad bsdus pa*. Otani University Collection no. 13971）. PVin（Dharmakīrti. *Pramāṇaviniścaya*: Ernst Steinkellner ed. *Pramāṇaviniścaya*. Chapters 1 and 2. 2007）. PVinṬ（Dharmottara. *Pramāṇaviniścayaṭīkā*: Sakai［2010a］, Wien）. 根本裕史［2011］:『ゲルク派における時間論の研究』平樂寺書店．M. Sakai［2010a］: *Dharmottaras Erklärung von Dharmakīrtis kṣaṇikatvānumāna*. Dissertation. Universität Wien. Id.［2010b］: "*Dharmottara's Interpretation of the Causelessness of Destruction*." JIBS 58-3: 1241–1245. E. Steinkellner［1979］: *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya. Zweites Kapitel: Svārthānumānam. Teil2*. Wien.

〈キーワード〉 Dharmottara, gTsang nag pa, ahetutva, bādhakapramāṇa

（大谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service